濃いめのカルピス

湫

久しぶりに風邪をひいた。
ダラダラと続いた梅雨は明けないまま、もうすぐ八月に入ろうかというこんな季節外れに。
原因は明確で、じっとりと湿りきった夜の暑さに耐えかねて、ここ数日エアコンを付けっぱなしにして床についていたからだろう。

連日の雨のせいで洗う暇もないシーツに横たわっていると、これは結構重めの風邪に違いない、たぶん体温三十八度超えてんな、なんてとりとめのない考えが、ぼんやりとした頭の中を流れていった。

そんなわけでかなり辛めの状況にあるのだけれど、生活能力が著しく低い私の部屋には、体温計はおろか風邪薬も、こういった時のための非常食も備え付けられてはいない。早急に自分一人で外へ出て、買い物に行く必要があるのだった。

親元を離れてもうかなり経つというのに、風邪をひいた時に助けを求められる友人や、恋人の一人もまともにいやしない自分の不甲斐なさに、我ながら苦笑する。

自分の半生をベッドの上で振り返っていても事態は好転しない。だるい身体を奮い立たせて起き上がり、部屋着の上から薄手のパーカーを羽織る。

結んだ髪はボサボサだし、顔もたぶんひどい状態だろうけど、マスクをすればまあ大丈夫だろう。
風邪を移さない心遣いと、顔を隠したい心境が両立出来て一石二鳥だ。なんて思いながら財布とスマホだけ持ち、ほとんど着の身着のままの状態で、散らかった部屋を横切りドアへ向かった。

外は今日も相変わらずの雨模様だ。
じっとりと湿った、生温くて重い空気が肌にまとわりつく。パリパリになったビニール傘を開き、タールめいて黒々とした水溜まりを避けながらコンビニへ向かった。

帰り道、足下へ当たる雨にウンザリしながら、パチモンのクロックスみたいなサンダルは雨の時に履くもんじゃないな、とほんの少し後悔した。

穴から入る雨水のせいで、小学校のプール上がりに感じた、濡れたサンダルと足の擦れる、あのなんとも言えない気持ち悪いかんじを追体験することになるから。

歩を進めるたびにサンダルの中で滑る足と、それと共に生じる不快な音に耐えながら、パラパラとビニール傘を鳴らす雨の中を歩いて行く。

ぼやけた頭とだるい身体に鞭を打って、なんとか外出と買い物というひと仕事を終えた。

食欲はまるでなかったけれど、何かしら食べなければという思いに駆られて、十秒チャージのゼリー飲料とレトルトの雑炊、あとは水分補給用にいくつか飲み物を買ってきた。

さすがのコンビニも、体温計や風邪薬は置いていないらしかった。

備えあれば憂いなし、という先人の諺が身に染みる。

なかったものは仕方が無いので、今日のところはゼリー飲料を無理矢理にでも流し込んで、大人しく床に着くしか無さそうだ。

もう懲りたのでエアコンをつけるのはやめておく。

なんだかんだで体力を消耗していたようで、普段よりも寝付き自体は良かったものの、熱のせいか喉の乾きが酷くて、間を空けずに何度も目が覚めてしまう。

買ってきたスポーツドリンクは直ぐに空になった。それでも喉の渇きは治まりそうにはなかったから、一緒に買ってきておいた濃いめのカルピスの蓋を開けた。

普段の私ならまず買わなかった、何年ぶりか越しに飲む久々のカルピスは、火照った身体に染み渡るように、渇きを潤してくれた。

今、最も自分が求めているものがこれに違いないという確かな感覚がある。熱に侵された風邪っぴきの身体に、これ以上ないほどしっくりくる感じがした。

ぼやけた頭の中でふと、幼い頃の記憶が思い出される。

小さな身体の私は、今日の私と同じように風邪をひいて、布団の上で横になっている。枕元にはストロー付きのキャラクター柄の水筒があって、普段よりもちょっとだけ濃いめのカルピスが入れてある。

時折母が傍らに訪れては、冷えピタを貼った私の額をやさしい手つきで撫で、何かを話しかける。母の持ってきてくれた、みかんの入った冷たいゼリーを食べた後で、苦手な粉薬を甘いカルピスでなんとか飲み込む。そうして、また眠りにつく。

安心と平穏で満たされていた、そんな懐かしい時間を、思い出して、噛み締めていた。

いつの間にか寝ていたようだ。枕元のスマホをつけると、どうやら昼手前まで泥のようになっていたらしい。

最初は口渇感のせいでちょくちょく目覚めていたとはいえ、病気のおかげで普段よりもぐっすりと眠れるというのは皮肉が効いていて少し笑える。

肌着とタオルケットは、寝ている間にかいた汗でグショグショだった。シーツとあわせて洗濯することを考えただけで、気が滅入る。

その代わり、たっぷりかいた汗のおかげか熱はだいぶ楽になった。身体のだるさはまだ残ってるけれど、昨日に比べればだいぶマシな方だ。

起き上がって、飲みかけのカルピスを手にとった。

冷蔵庫に入れ忘れてすっかり温くなったそれは、昨日の美味さとは縁遠い、いやに甘ったるい味がした。